

【挨拶と趣旨説明】

京都産業大学社会安全・警察学研究所 研究会
「警察の国際比較：デモクラシーはどのように機能するのか」

田 村 正 博

社会安全・警察学研究所 所長
京都産業大学法学部 教授

久 保 秀 雄

社会安全・警察学研究所 所員
京都産業大学法学部 准教授

田村：今日は皆さま大変お忙しい中、当研究所の研究会にご参加いただき、まことにありがとうございます。特に、来日中のカリフォルニア大学ジョナサン・サイモン先生にもご参加いただきましたことに、心から感謝申し上げます。

当研究所は2013年に開設された研究所で、社会安全や警察学を中心に研究しています。先ほど、久保先生からサイモン先生とご一緒に上賀茂神社の周辺を散策されたとお聞きしましたが、実はこの場所に研究所が移転したのは最近のことで、ようやく引っ越し等の片付けも終わったところです。

今日は「警察の国際比較：デモクラシーはどのように機能するのか」と題して、日本、韓国、フランスそしてアメリカについての比較が行われますが、活発な意見交換がなされ、お互いにとって、よい研究成果がもたらされることを願っております。

久保：それでは最初に、本日の研究会の趣旨についてご説明いたします。社会安全・警察学研究所は「警察」を主要な研究テーマとしていますが、本日の研究会では「デモクラシー」を切り口として警察にアプローチしていきます。デモクラシーという切り口であれば、誰もが市民として関心を持つべき問題として設定できますので、警察にはこれまであまり興味を持たなかった方でもアプローチしやすくなるのではないのでしょうか。

なお、警察のような官僚制化された組織をデモクラシーとの関係に着目して考察する観点とは、官僚制について不朽の研究業績を残したマックス・ウェーバーにとって非常に重要な意義を持ちました。というのも、ウェーバーは、近代における止めどなき官僚制化への強い危機感、すなわち、市民が官僚制に隷属する庇護民へと転落してしまうのではないかと懸念する悲観的な見通しを有していたからです。

他方で、ウェーバーの業績を世界的に普及させる立役者となったタルコット・パーソンズは、ウェーバーの卓越した研究成果を称賛しつつも、その悲観的な見通しについては疑問を呈しています。というのも、パーソンズのみとすると、近代においては官僚制化だけでなくデモクラシーの進展も確認できるからです。パーソンズは、デモクラシーに親和的な合議制やアソシエーションなどの隆盛・浸透に着目することで、デモクラシーが官僚制によって窒息させられるとは考えませんでした。双方はあくまで競合すると理解したのです。

さらに、パーソンズは、それまで排除されてきた各種のマイノリティが、徐々にではあれ様々な領域で包摂されメンバーシップが認められていく過程も、デモクラシーの進展を示す指標の一つになると捉えていました。もちろん、その

過程には葛藤や軋轢・衝突がつきもので、それをどう処理するかが重要な問題となります。それは、官僚制化された組織にとっても同様です。デモクラシーの進展とともに、対外的にも対内的にもマイノリティの処遇のあり方が問われることになるからです。本日の研究会では、そうしたマイノリティのメンバーシップに関わる問題も具体的なトピックとして登場します。

このように、学説上も重要な意義を有するデモクラシーとの関係を共通の切り口として日・韓・仏・米の国際比較を行い、警察への理解を深めていきたいと考えています。それぞれのところで、デモクラシーが良くも悪くもどのように機能しているのか、もしくはしていないのか、幅広く把握していくことは、警察はもちろんデモクラシーをめぐる研究の今後の展開に有益な貢献となるでしょう。